

学位論文要旨

題目 台日における不登校現象とフリースクールに関する比較研究

不登校現象は義務教育が発足して以来、長期欠席として存在していたが、台湾と日本においてはいずれも 1990 年代以降から急激に増加し、大きな社会問題となっている。台日は類似する教育体制を取り、何度も教育改革が行なわれてきた。しかし、その成果は上がらず、不登校は一層増加する傾向にある。その背景には、台日それぞれの社会状況があり、それらは一様ではない。台湾では、これまで不登校の原因を個人または家庭に求める傾向が強かった。一方、日本では、不登校は誰でもなる可能性があるとし、その原因を多様かつ複雑に捉え、とりわけ教育システムに欠陥があると思われる。そのため、「明るい不登校」、「笑う不登校」などのスローガンがあるように、不登校によるレッテル化の脱却を図っている。このような現状に対して、台日のいずれにおいても教育の機会均等の理念のもとで、解決策が求められている。

本論文の目的は、比較文化の手法によって、台日の不登校現象を比較し、その類似点と差異点を明らかにすることである。また、不登校現象の原因と、その実践的対応施設としてのフリースクールの可能性を追求することである。この課題を解明するため、台湾と日本の中学校の生徒を対象にしたアンケート調査と、フリースクールの運営体制と理念に基づいたフリースクール類型における参与観察と聞き取り調査の結果を用いた。

序章「不登校とフリースクールの台日比較研究の視座」では、本研究の目的と方法に加えて、研究の意義を述べた。不登校現象の検討では、欠席行動が主な考察の対象であったが、児童・生徒を学校へ向かわせる要素を理解しない限り、不登校の解決には結びつかない。すなわち、不登校の増加に注目するだけでなく、児童・生徒が学校に何を求め、また、学校へ行くのはどのような規範力に基づいているのか。その内実の的確な把握と背景の実証的・総合的研究を推し進めることが重要である。その場合、社会的・文化的特異性と相対性を考慮しながら、登校している児童・生徒の登校要因を理解すれば、今後の学校教育のあり方、または不登校対策を考える際に、より一層の効果的な対策が可能となると考える。

第 1 章「台湾の教育システムと不登校」では、台湾の教育システムは小中一貫の 9 年義務教育を実施しており、進学率が高いのが特徴である。その背景として、社会が高学歴を望むことと、それに応えるべく高校と大学の量的増加があった。そして、台湾の不登校は①公式データの不足、②不登校定義の不明確、③データの信頼性に欠けている、という問題点をもっている。これらのことによって、不登校の実態を掴むに

は難しい現状である。

第2章「日本の教育システムと不登校」では、日本の教育システムは業績主義に基づき、偏差値重視傾向がみられた。このことから、公教育体制と合わない児童・生徒が次第に増え、教育の私事化として発展してきた。また、不登校を非行ではなく、「心の問題」とする姿勢も判明した。

第3章「台日不登校研究に関する考察」では、台湾と日本の不登校研究を検討した。先行研究から、児童・生徒の不登校行動には、登校回避感情がその基底となっていることを明らかにした。登校回避感情はやがて欠席として現われてくる。不登校と登校回避感情をめぐる議論を整理して、「学校生活にみる登校回避感情の規定要因」という課題を提示した。

第4章「台日中学生の登校回避感情と学校生活」では、台湾と日本の中学校で行なったアンケート調査のデータを用いて、登校回避感情の形成過程に関する要因を「学校満足度」、「信頼できる友人の有無」、「学業成績」、「地域差」、「学校差」から分析した。さらに、登校回避感情の生成には、以上の要因以外の文化的要因である「登校規範」が存在することを明らかにした。

第5章「台日不登校対策と学校外の対応機関」では、台日の不登校対策を検討し、近年、不登校対策として有効とされている学校外の対応機関の現状と課題を解明した。

第6章「台日フリースクールの事例研究」では、不登校の実践的対応としてのフリースクールの台湾と日本における事例研究を行なった。フリースクールをその運営と理念を基に類型化し、それぞれのフリースクールにおける不登校児童・生徒に対する役割を分析した。台日間で共通しているのは、フリースクールは学校を批判する立場にあるが、その学校教育システムのなかでの付随的位置づけがみられた。そして、このようなフリースクールの持つ教育的意義として、不登校対策のみならず、学校教育の補完的機能と新たな教育としての可能性がみられる点があった。

終章「不登校とフリースクールの今後の課題」では、本研究を通して明らかになった台湾と日本の学校教育体制の特徴から、不登校対策としてのフリースクールの可能性について検討した。現在、台湾では国家の教育に対する介入度が高く、オルタナティブな教育理念の実現は難しい状態にある。つまり、国家の支援による公的志向の一元的な体制をとっており、フリースクールの可能性が制限されている。それに対して、日本では私的志向の多元的なフリースクールが数多く成立している。

本研究の考察結果から、台湾でも日本でも中学生の半数以上が登校回避感情を抱いており、それは学校に対する不満から来るものであることが判明した。このことは、今後、台湾でも日本と同じように、誰が不登校になってもおかしくない状態になることを示唆している。以上の分析を基に、台湾より先行している日本の不登校研究と、フリースクールの発展を参考にして、台湾における不登校研究の新たな視点とフリースクールの方向性を示した。